



大学の学び

1年次から実践的な問題解決に取り組み、 持続可能な社会の担い手を目指す

慶應義塾大学 総合政策学部
XSDG・ラボ(蟹江研究室)

環境問題や社会問題を 自身の手で解決したい

慶應義塾大学総合政策学部は、グローバル社会の問題の発見・解決に取り組み、社会を先導する「問題解決のプロフェッショナル」となる人材を育成している。

総合政策学部4年の大貫萌子さん、幼少期をヨーロッパとアフリカ

私たちが紹介します



総合政策学部4年
大貫萌子
おおぬき・ももこ
東京都・私立国際基督教
大学高校卒業。



総合政策学部2年
落合航一郎
おちあい・こういちろう
東京都立武蔵高校卒業。

で過ごし、貧富の差などの社会問題に関心を持つようになった。高校時代には、SDGsの普及を目指すNGOの活動に参加していたが、次第に目標の浸透だけでは不十分ではないかと思いはじめた。

「どのステークホルダーの何が変われれば、社会変革を起こせるのかと考えた時に、個人の消費行動を変えることが鍵なのではないかと思うようになった。そこで、サステイナビリティ学を専門に研究している蟹江憲史教授の下で深く学ぼうと、入学を決めました」

同学部2年の落合航一郎さんは、高校時代に参加したボルネオ島(※1)でのフィールドツアーで、パーム油を生産するために熱帯雨林を伐採して開墾されたアブラヤシ農園の状況を目のあたりにし、環境問

題の解決に関心を持った。

「農園が見渡せる展望台に立つと、鳥や虫の鳴き声も、川のせせらぎも聞こえない異様な空間が広がっていました。その空間を生んだ原因は私たちの消費だと危機感を抱き、持続可能なパーム油の生産を行うために、国やNGOが連携して国際的な認証組織をつくることができなにか、研究したいと考えました」

同学部では、授業科目は学年別に設置されており、学生が自分にとって必要な科目を必要な学年で履修できる仕組みになっている。大貫さんは、1・2年次は、どのように社会が形成されているのかを学びたいと考えた。特に自身の研究に役立つのは、蟹江教授の「環境対応プラクティス」という科目だった。環境に関する国際制度の設計には、

国家間の交渉が不可欠であり、その過程を体験的に学ぶことができた。「社会的合意を果たすには、自国の利益を主張するのではなく、互いの妥協点を見いだしながら合意を図っていく難しさを学びました」

熱意や行動力だけでなく、 学術的な意義を意識し研究

同学部の学びの中心となるのは、1年次から所属できる研究会だ。学年に関係なく、所属する学生が学び合い、問題解決に実践的に取り組む。

2人は、1年次の秋学期から蟹江教授の「XSDG・ラボ」に所属。「目標17 パートナシップで目標を達成しよう」などのSDGsに関する研究のほか、企業や自治体と連携したプロジェクトに取り組む。

この学びに関する 他のSDGsの目標



*1 ボルネオはマレーシア領、インドネシア領、ブルネイからなる島。落合さんはボルネオ島のマレーシア領、サバ州に渡航。

落合さんが1年次に参加したのは、東京オリンピック・パラリンピックが社会に与える影響について調べ、SDGsの観点から評価する新聞社と連携したプロジェクトだ(写真1)。会場のバリアフリーの状況や、会場で提供される食材の持続可能な調達状況(※2)などを調べた。研究の過程で、高校時代との問題への取り組み方の違いを感じた。



写真1 落合さんは、ラボを代表して「小学生SDGsサミット」に参加。自身のプロジェクトについて発表し、小学生の時から持続可能性について考える重要性を訴えた。

「高校時代は、例えば、ゴミ問題が気になれば、繁華街に「ゴミ拾いに行くなど、まず行動に移していました。一方、大学での研究は、仮説を裏づけるデータを収集し、そこから新しい価値観を見いだして発表することで、社会のより大きな動きにつながっていきます。熱意や行動力を大

事にしつつ、新規性や有効性、信頼性といった学術的な意義も意識するようにになりました」(落合さん)

企業のSDGsへの貢献度を評価するプロジェクトを立案

大貫さんは、1・2年次に兵庫県中学校でSDGs教育を行うプロジェクトに参加(写真2)。3年次には、元々取り組みたいと思っていた、ステークホルダーの違いによるSDGsへの貢献度を研究しようとして、「学生によるSDGs貢献度に関する企業分析と評価プロジェクト」を蟹江教授に提案し、現在は、リーダーとしてメンバー20人を率いている。



写真2 大貫さんは、1年次に、兵庫県豊岡市の中学生向けに、SDGsの視点で同市へのUターン人口を増やす方法をともに考える授業を実施した。

「企業のSDGsへの貢献度を評

価する項目を、新聞社が実施するSDGsの調査をベースに、学生の視点を踏まえて設定しようとしています。難しいのは、主観と根拠のバランスです。新しい評価指標を追加する際も、明確な根拠を示さなければなりません。自分の主観だけで決めていないか、常に自分を客観視して、研究を進めています」(大貫さん)

大貫さんは、同プロジェクトを卒業論文にまとめる予定だ。就職活動中の学生が企業のSDGsへの貢献度を踏まえて、仕事や職場を選択するようになることに貢献できればと考えている(目標8)。

「SDGsウォッシュ」(※3)問題に関心のあつた落合さんも、今年度から同プロジェクトに参加。ラボのメンバーと協働し、「新型コロナウイルスの感染拡大などの緊急時におけるマニュアルの有無」といった従来にはなかった企業の評価項目を追加したと言つた。

「若い世代が求めている企業のあり方を明確に示すことで、各企業の取り組みが表面的なものではなく、より実質的なものになればと考えています(目標16)」(落合さん)

学びとSDGs

プロジェクトでの実践から、使える知識・技能を身につける



慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科
教授
蟹江憲史
かえ・のりちか

私のラボでは、本学部の目指す「問題解決のプロフェッショナル」を育成するため、SDGsの考え方を応用し、企業や地域の問題解決に取り組む学びを進めています。学部1年生から大学院生までが、1つのプロジェクトとともに実践的に学ぶ中で、社会で活用できる知識・技能を身につけてほしいと考えています。

ただ、理論的な基盤がなく、現場の雰囲気にならされて活動しているだけでは、真の問題解決にはたどり着けません。実践とともに、知識・技能の重要性も理解してほしいと思っています。

また、問題に深く切り込むには、多様な経験に基づいた自分の考えを持つことが重要です。国際連合の本部やハイレベル政治フォーラムなどに学生を同行させ、広い視点で問題を捉える感性を養えるようにしています。

SDGsに関心がある高校生には、本当に自分が課題だと思つたことを追究し、多くの仲間と議論する経験を積んでほしいと思います。

※2 森林・海洋資源の保全や生物多様性に配慮した採取・栽培、食材の生産における強制労働や木材の違法伐採の排除など、持続可能性に配慮して食材が調達されているかを調査。 ※3 実態が伴わないのにSDGsに取り組んでいると主張すること。